



ぷらっとシネマ 女たちが繋がることへの恐怖『あるスキャンダルの覚え書き』（リチャード・エア監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15463">http://hdl.handle.net/10466/15463</a>



## 女たちが繋がることへの恐怖——

『あるスキャンダルの覚え書き』（リチャード・エア監督）

ロンドン郊外の中学校に新しく着任した美術教師シーバは美しく魅力的で、皆の注目の的だ。ベテランの歴史教師バーバラも、彼女から目が離せない。映画は、バーバラがつける日記を観客も共有しながら進行する。愛猫と静かな生活を送るバーバラは、遠くからシーバを見ているだけであったが、ある日うまく機会をとらえて話しを交わすようになる。家に招かれるようになり、シーバの印象と違う、ぱっとしない夫と障害のある息子との家族生活を垣間見る。シーバの心の底にある満たされたい気持ちを知ったバーバラは、彼女への関心をさらに強くなる。

シーバの言動を観察するバーバラは、シーバと15歳の生徒が性的関係にあることを知ったときから、シーバへの支配と操作をじわじわと強めていく。

他人には見せない日記が、書き手であるバーバラの1人称の語りで観客だけに伝えられる。こういう場合、一般的には、1人称の語り手は観客にとって最も信頼できる存在であり、観客はその語り手と一体化する。しかしこの映画の観客は、やがてこの語り手/日記の書き手が、独占欲の闇を抱えた、最も信用ならない人物であることを知らされる。

バーバラだけがつかんだシーバの秘密。その特権的な位置から、暗い悦びに胸躍らせながら、バーバラはシーバの生活に介入していく。

未成年者である生徒との関係は、バーバラの周到な企みで世の知るところとなる。スキャンダル報道でメディアが騒ぎたてるなか、逃げ場を失ったシーバはバーバラの家に避難先を求める。いまやシーバはバーバラの掌中にある。しかしシーバもバーバラの欲望に気づく時が訪れる。

女性作家ゾエ・ヘラーのヒット小説の映画化で、2大女優の演技合戦が見ものという惹句につられて、映画館に足を運んだものの、遠慮のない女性憎悪の調子に辟易した。

第一に問題なのは、暗い独占欲を秘めた人物であるバーバラの人物造型である。退屈至極の凡々たる生活者に見える彼女が隠しもつ常軌を逸した独占欲、気味の悪いまでの周到さは、単にバーバラ個人の性癖や個性として描かれているのではない。バーバラの独占欲と不気味さは、彼女が独身で、恋愛経験もなく、孤独であることに由来する。そう観客に思わせる描写がそこにある。これは長年、独身で働きつづけてきた女性に対するパ

ターン化した偏見そのままである。

第二の問題は、シーバの人物造型である。未成年の生徒との性的関係は、年齢や社会的立場の違いを越えて惹かれあう2人の恋愛ではない。また、シーバが、若年者への性的偏愛者だということでもない。シーバが、はるかに年下の少年と関係をもつに至る動機は、家族関係のストレスと不満にある。観客はまちがいにそう見る。しかし夫は、たしかに風采のあがらない男だが、妻を殴ったり裏切ったりしているわけではない。また、障害児を育てるのほどどこでも大変であるとしても、だから不幸だということにはならないだろう。むしろ、そこでしか得られない幸福のあることは、多くの人が知っていると思う。

第三の問題は、一種のホラー（恐怖）映画であるこの作品の核心にあるのが、女性と女性が繋がることへの恐怖であることだ。ホラー映画の常として、観客は、その恐怖を共有するように求められる。この作品を評して「女はコワイ」と言う者が怖れるのは、女と繋がろうとする女である。シーバに対するバーバラの欲望は、性愛的なものというよりも、相手の人格に対する全的支配をめざしているに見える。それだけに、もっと性に焦点化した、性愛としてのレスビアニズムに対するホモフォビック（同性愛者嫌悪的）な態度はすでに明言されていると言ってもよい。女が助けあい、支えあい、交流、交換のなかで豊かになっていくことへの、底深い恐怖がここにはある。原作にもあったその要素が、映画では、高い技量をもつ演技者を迎えることでさらに増幅されてしまった。

同じ頃に公開の、アルモドヴァール監督の『ヴォルヴェール』は、対立があっても結局は支えあう女性たちを描いていて感動的だ。アルモドヴァールらしい超現実的な描写もないまぜにしながら、現実を生き抜くために女たちは理屈を越えて支えあう。性暴力をふるう男は女に殺されてしまうが、女たちはその死体を彼の好きだった樹のそばに埋めて、墓碑銘まで彫ってやる。悪を懲らしめることはしても、女たちが協力して決行するリベンジには愛と未来があるのだ。

もちろん、いろんな映画があつてよいのだが、ありきたりの偏見に満ちた女性像をなぞるのでなく、せめてそれに挑戦するくらいのことはしてほしいものだ。

（2006年、イギリス映画、92分）